

令和5年度（2023年実施）大学入学共通テスト

「英語（リーディング）」について

1. はじめに

今年度で3年目となる大学入学共通テストの英語（リーディング）（以下、「共通テスト」という。）は、今回もすべて読解問題で構成されており、設問数が昨年度から2問増えて39問、マーク数が昨年度から1つ増えて49という若干の変更はあったものの、そのほかの大問数、配点、時間、問題形式や難易度など昨年度から大きく変化したところはなかった。その一方で、平均点が53.81点と昨年度から約8点下がっているのは、昨年度よりもやや語数や分量が増え、時間内に解ききれない受験生が増えたことや、今年度の英語の受験者数の減少（昨年度：480,762人 → 今年度：463,985人）による受験者層の変化などが背景にあると推測する。

	大問数	設問数	マーク数	総語数	平均点
2023 共通テスト（本試験）	6	39	49	約6100語	53.81
2022 共通テスト（本試験）	6	37	48	約6000語	61.80
2021 共通テスト（第1日程）	6	38	47	約5500語	58.80
2020 センター試験（本試験）	6	46	54	約4300語	58.15 (100点満点換算)

2. ポイント解説

・第2問A

イギリスのウェブサイトという設定上、本文の広告内に **colour(s)**, **analyse(s)**, **personalise(d)** などといったイギリス英語の綴りが採用された（なお、イギリス英語は第5問でも用いられている）。学習指導要領で様々な英語が国際的に広く使用されている実態にも配慮する旨が謳われており、英語の多様性を重視したこのような出題は好ましい傾向であるといえる。

また、本大問には昨年度では出題がなかった **opinion** を問う問題が出題されていた。**fact/opinion** 問題に関しては、**fact** と **opinion** の境界線が曖昧であり（「本文内に書かれていることを事実と捉えるなら、本文中で述べられている筆者の意見も事実となる」のではないか）、そもそも、情報の選別に過ぎない「問題に提示された内容を **fact** か **opinion** かの二つに分けること」に何か深い意味はあるのかは甚だ疑問が残り、本文の内容を読み取って答える問題と本質的には変わらないのではないかと考える。

・第3問A 問1

本文の内容を読みとって、バックパックに荷物を正しく詰めた図の選択肢を答えるという問題。昨年度と一昨年度は本文と図の2つから情報を読みとって、各設問に答える形式であったが、今年度は本文のみから読み取って選択肢の図を答える形式になったことから、解答の根拠は特定しやすかったのではないかと考える。

・第6問B

本文の内容をもとにワークシートの穴埋めをする問題である。昨年度よりも設問数が2問(3問→5問)、マーク数が1つ(44~48 → 44~49)それぞれ増えた。緩歩動物(tardigrade:クマムシ)の消化器系の位置5か所を問う問題などが出題された。受験生にはなじみの薄いジャンル・内容の英文であり、tardigradeをはじめ一部に専門用語が使用されているが、背景知識や専門知識がなくても本文の記述から推測し、解答が導けるよう、配慮がなされていたと考える。しかし、未知の語を見て諦めたり、解答時間が足りず十分に組み立てなかつたりした受験生も少なからずいた可能性がある。

3. まとめ

昨年度から出題傾向に大きな変更は見られず、「情報処理能力を測っているのではないかと批判的な意見もあるように、今年度の共通テストリーディングも引き続き表面的な読み取りで解答を導く設問がほとんどだった。これは、共通テストの問題作成の方針で実際のコミュニケーションの場面や状況を想定していることが示されており、「その場で読み取る」ことが実践的なコミュニケーションの場面では必要であるという考えに基づいて問題が作成されているからであろう。

しかし、実際に英語を使用する場面は、インターネットで調べものをしたり、短時間で情報を収集したりするだけではなく、丁寧に文章を読み、深い理解や考察が求められる場面や状況は高校生であっても当然あり得る。どのような場面でも、その状況に応じた適切な読み方ができるような問題構成にしたほうがより「実践的」であり、受験生の英語力向上に寄与するのではないだろうか。また、第5問や第6問A・Bでは指示文や設問ではなくても読み取りと解答に影響がない場面設定がなされており、「現実的な場面」に拘泥するあまり、テストに不要な要素を過度に取り入れているようにも思われた。

一方で、令和7年度大学入学共通テストの試作問題「英語(リーディング)」(以下、「試作問題」という。)では、第A問(あるテーマについて複数の人物の意見を整理する問題)、第B問(あるテーマについて自分の意見を述べた原稿を推敲する場面の問題)が提示された。これらを見る限りでは問題全体の語数がさらに増え、その結果表面的な読み取りで解答を導く傾向が一層強まる可能性がある。新課程入試となる令和7年度の共通テストの問題作成方針で、「知識の理解の質を問う問題」から「深い理解を伴った知識の

質を問う問題」への若干の文言の変更はあったものの、共通テストの規模や影響力の大きさを考慮すれば、高等学校での英語のリーディングには丁寧に文章を読んだり、理解を深めて考察したりする能力は求められていない、との誤ったメッセージを教育の現場に対して発信することにならないか、危惧される場所である。

本来の英語教育改革の目的である「グローバル人材の育成」を見失わず、また、学習指導要領で目指す「思考力・判断力・表現力」の育成のためにも、高等学校での学習が共通テストの対策のための学習となることがないように、共通テストの問題構成や全体の語数、場面の設定など、大学入学選抜試験としてより適切なものになるよう、より広い議論・検討がなされることを望みたい。

以上

<参考資料>

- ・大学入試センターホームページ
「令和5年度大学入学共通テスト実施結果の概要」
「大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書」